

令和 4 年 6 月 30 日現在

機関番号：99999
研究種目：奨励研究
研究期間：2021～2021
課題番号：21H03934
研究課題名 小中9年間の系統生を意識したリズム系ダンスのカリキュラムデザインと評価

研究代表者

酒井 祐太 (Sakai, Yuta)

府中町立府中東小学校・教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 410,000円

研究成果の概要：「リズム」「表現」「体幹部の動き」に着目し、協働しながら学びを深めていくことを中心に据えて研究を行った。小学校低学年では、「リズムに乗る感覚」を養うことと「表現の幅を広げる」ことを中心とし、中学年では、動きの質を高めるために「体幹部の動き」に着目した。高学年では、身体表現 空間 時間 関係の4つの視点を意識し、2、3人のグループで踊る活動を取り入れた。中学校では、これまでに学習したことを土台として、グループの人数を増やし、自分たちで構成する単元を構成した。評価については、各学年の段階でキーワードとして設定した項目を基に評価すると共に、児童と共にルーブリックを作った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ダンスの指導に対して苦手意識をもった教員や評価について悩んでいる現場にとって、具体的なカリキュラムデザインと評価方法を示したものである。感染症によって、活動が制限され、心身を解放して自己を表現することが少なくなった社会において、児童生徒の自己表現力の向上や身体を基にコミュニケーションを図ることのできるリズムダンスの可能性を伝える研究だと考える。

研究分野：リズムダンス

キーワード：リズム 表現 オリジナリティー 体幹 評価 なりきり 協働 主体性

1. 研究の目的

リズムダンスの学習において、「豊かに学ぶ児童の育成」を目指し、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の観点から単元デザインを構築し、小中9年間の系統表及び指導法を完成させる。

単元デザインを基に授業実践を行い、「リズムに乗る」「表現の広がり」を視点から評価についてのルーブリックを完成させる。

2. 研究成果

小学校低学年の段階では、「リズムに乗る」とことと「表現の幅を広げる」ことを中心に単元構成を行った。「リズムに乗る」ことについては、ダンスの基本的なリズムである体幹を上下に動かす「バウンス」の動きを取り入れた。その際、弾むように踊ることができるように、テンポが一定であり、「ドン」と拍を感じることができる曲を選定した。「表現の幅を広げる」という点においては、単元の前半部に「基本的なステップ」を楽しむ活動を設定し、後半部では、多様な表現を創出できるように、身の回りのものからインスピレーションを受けたものを表現する「なりきりダンスタイム」を設定した。基本的な5つのステップを取り入れることで、音楽が流れた時に、学んだ5つのステップを基に、手や頭などを使い、オリジナルの動きを考えていた。「なりきりダンス」の時間には、カマキリ、カエルといった生き物の特徴を基に表現したり、花火、波のように、自然などを基にイメージを広げて表現したりすることができた。また、「オノマトペダンス」と称して、国語科で学習した「オノマトペ」からイメージを膨らませ、自分たちの動きに取り入れる様相が見られた。「なりきりダンス」「オノマトペダンス」においても、同じ対象のものであっても、それぞれ感じるものが違うことから、表現の広がりに加えて、感じ方の違いと面白さについて実感している振り返りがあった。

中学年の段階では、低学年での学習を生かし、さらに「動きの質を高める」ことに重点を置いた単元構成を設定した。「動きの質を高める」ために、ひねる 体側（伸ばす・縮める）丸める・反らすの3観点を中心に学習を進めた。同じサイドステップでも、これら3観点を意識した動きとそうでない動きを比較・分析することで、動きの大きさ（ダイナミック）につなげることが実感として得ることができた。また、体幹部の動きに焦点を当てることによって、これまでに学んだステップとの相性についても、児童自身が踊ったり、動画で確認したりすることで明らかになった部分があった。

高学年の段階では、低・中学年の学びを生かし、3人程度のグループで 身体 空間 時間 関係の4観点を意識した単元構成を設定した。低・中学年においてもペアでの活動を行ったが、低学年においては、リズムのとりにくい児童にとって、一緒に踊ることでリズムに合わせて踊ることの一助となった。中学年では、動きの質を高めるために、互いの動きを見合ったり、揃えることの楽しさを感じたりすることができた。高学年では、4観点を基に、仲間と合わせたり、ずらしたりしてダンスを構成することの楽しさを感じることを中心に置いた。身体については、腕や頭などの使い方についてさらに動きの質を高める関わりが見られた。空間については、前後左右斜め、円を描くなど、空間の使い方について考えた。時間については、リズムを倍でとったり、2分の1でとったり、休符を入れたりすることで、リズムの変化を楽しむことができた。関係については、グループの仲間とそろえたり、対象的に動いたり、交差したり、ソコを入れたり、ずらしたりと、仲間と踊ることで広がる表現について考えることができた。

中学校の段階では、小学校での素地を基にして、グループの人数を増やし、自分たちの力で作品を創り上げていく単元構成を行った。グループのリーダーを中心に、ダンスグループの動きをアレンジしたり、空間的な関わりを考えたりとより主体的にダンスを創り上げる活動を取り入れた。自分たちで撮影したものを見て、課題を見つけ、課題解決のためにどのように動けば良いか、どんな動きにすれば良いかを協働的に考え、高め合う姿が見られた。

これらのことから、低学年では、恥ずかしさを感じる時間が少ない時期を生かして、様々な対象を基に「表現の幅を広げる」とこと、「リズムに乗る」というリズムダンスにおいて一番大切な感覚を養う単元構成 中学年では、動きの質を高めるために「体幹部の動き」に着目した単元構成 高学年では、低・中学年での学びを生かし、グループで踊ることの楽しさを感じる単元構成 中学校では、小学校での素地を生かし、グループの人数を増やし、自分たちで作品を創ることの楽しさを追求した単元構成を考えた。

「評価」については、各段階でキーワードとして大切にしてきた観点を基に、児童と共に、動きと言葉をつながげながらルーブリックを作成した。ルーブリックを作成することで、児童が観点を意識してダンスをする姿が見られた。また、自分の踊りに生かすだけでなく、仲間のダンスを見て、観点を基に動きを高め合う姿も見ることができた。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
栗原 良典	(kurihara yoshinori)